

高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究(2)

——進路形成過程における転機が存在とジェンダーの影響——

酒井 朗¹ 千葉勝吾² 広崎純子³ 齋藤玲奈⁴

本研究は、ある商業高校での進路選択支援活動の事例から、生徒の進路選択におけるジェンダー要因の影響について新たな知見を導こうとするものである。支援活動の経過から我々は、支援を通じ生徒の進路意識が大きく変化する、いわゆる「転機」が見られたのは女子生徒だけであることを見いだした。本研究は、この転機の実例分析を通じて、進路多様校における女子生徒は2重の意味で「大学に行っても仕方がない存在」として価値剝奪されており、支援を通じて、彼女たちが被差別者の「アイデンティティ問題」として大学進学に取り組むようになることを明らかにした。反対に、男子生徒は「男は大学進学」という世間的な価値観に呪縛される中で学校を特に選ばなければ進学できるという状況に沿って進学していく。教育におけるジェンダー要因が差別問題として把握すべき側面を有していることが伺えるのである。

1 研究の目的

前回の報告(酒井他 2004)では、A商業高校での進路選択支援活動について紹介し、進路多様校に通う生徒の進路選択にみる「ゆらぎ」の存在と、そうした生徒への支援のあり方について検討した。本稿では前回の報告をふまえ、進路選択における転機が存在にスポットを当て、そこからジェンダーと進路という教育社会学の中心的テーマの1つに対し、新たな視点を提起したい。

酒井他(2004)では女子の事例のみを取り上げたため、ジェンダーと進路に関する考察は今後の課題として残された。だが、その後男子生徒の参加が増え、この点への分析が可能になると、進路選択における転機が存在がジェンダーにより構造化されていることを理解するに至った。本稿はこの点について具体例を報告するとともに、その理論的な意味合いを考察するものである。

転機の問題はデンジン(1992)により「エピファニー体験」としてライフストーリー論の中心課題の1つとして提起されてきた。ただし彼の言うエピファニーでは、虐待やアルコール中毒などの問題的状況において発生するものが想定されており、必ずしもここでいう転機と同質のものではない。進路選択における転機とは、氏が想定するほど激烈な経験とは言えないまでも、生徒のそれまでの進路展望や動機付けの度合いが大き

く変わるような何らかの経験を意味している。このような意味での転機は、トラッキングシステムの下にある高校生の進路選択では十分生じることが予想される。なぜなら、各トラックに予定された進路から大きく逸脱して進路を選択することは、きわめて鮮烈な選択として意識されるし、そこでは様々な物事の意味変容が生じるものと思われるからである。

だが我々の支援活動では、進路選択においてこうした転機が明確に見られたのはもっぱら女子であった。反対に活動に参加した男子には転機があまりはっきりとは経験されなかった。女子は多くの場合ある時点から意識の変容をはっきりした形で自覚し、大学進学に向けて、それ以前とは異なった度合いで努力しようとしたが、男子にはそうした転換点は見られなかった。

このことは高校生の進路選択における転機が存在がジェンダーによって構造化されていることを示唆するものであり、それは1つの社会的事実として社会学的に説明すべき事象である。果たして、なぜ転機の経験のされ方に男女で違いが見られるのだろうか。本稿ではこのような問題関心のもとに、具体的には以下の種々の問いに答えることを通じて考察を深めていきたい。

(1)転機を経験した生徒達は、支援の取り組みの中で転機としてどのような状況に遭遇し、それをどう受け止め、どう対処したのか。

1 お茶の水女子大学 2 東京都立田園調布高校 3 早稲田大学 4 東京大学大学院

(2)その前後において、支援にあたった我々はいかなる影響を与えたのか。

(3)その中で、生徒たちは自分が何者であるのか、あり得るのかについて、どのように思いを巡らしたのか。

(4)転機が存在が明確な形でみられない生徒はどのようにして進路を選択していったのか。

(5)転機が存在がみられる生徒とそうではない生徒の違いは何によるのか。そこにはジェンダーという要因はいかなる形で介在しているのか。

2 「ジェンダーと進路」研究における転機問題の重要性

「ジェンダーと進路」の問題は、多くの教育社会学者がとりあげてきた問題である。そこでは、女性がなぜ女性向きの進路を選択していくのかといったジェンダー・トラックの問題が取り上げられてきた(中西1998)。女性が伝統的な女性性を内面化していく理由について、たとえば木村(涼)(1992)は、虚偽意識仮説、合理的選択仮説、適合化仮説、の3つを挙げている。こうした一連の研究は、女性がなぜ低位の進路に甘んじるのかという問題設定を立ててきたが、我々がA商業高校での進路選択支援活動で見いだしたのは、むしろいったん進学を決めた場合には、女子生徒の方がアスピレーション(文字通りの野心)が高く、努力の度合いも高い場合が見られることである。

こうした事象を「ジェンダーと進路」研究はこれまで対象とすることはなかった。先行研究では当該トラックに予定された進路をそれぞれの性の生徒がどのようにして選択するのかの説明されてきたのであり、そこから逸脱するケースは看過されてきた。だが、先に述べたように、逸脱事例においてもまたジェンダーによる構造化が見られるのであればそれは説明されるべき事象であろう。

しかも逸脱事例の研究は、しばしば先行研究の前提となる議論に対して異議を申し立てる。今回の事例を通じて痛感されるのは、先行研究が社会化論に過度に依拠してきたのではないかという問題である。女子は女子向けの進路に就くことが想定され、それが説明の対象とされてきた。だが、女子が敢えて女子向けの進路を選択しない場合にもそこにはジェンダーの要因が介在している。とするならば、ジェンダーはいかなる要因として、そこに介在するのだろうか。本報告はこの点について理論的に検討することも課題の1つである。

3 プロジェクトの概要

(1)A商業高校について

A商は、首都圏都市部にある全日制公立高校で、1学年4クラスの小規模校である。入試のレベルは下位ランクの1つで、普通科の最下位校とどちらにするか迷って入学してくる生徒も多い。本研究の主な対象は2004年3月に卒業した学年であるが、入学時点では160名であったものの卒業者は105名にすぎず、男女比は約1対4である。

(2)進路状況と課題

A商はいわゆる進路多様校であり、卒業生に占める就職内定者の減少傾向が続き、2003年3月の就職内定者数は過去最低の23名(19%)であった。これに対して進学者は横ばいであり、したがって、進路未定者が増加した。この状況に危機感を持った学校は2004年度、進路指導部と3年担任が中心となって個別指導を徹底する改善に乗り出した。その結果、2004年3月の卒業生の就職内定者は43名(33%)となり未定者も減少した。

大学進学についても、2003年3月の進学者数5名に対して2004年3月の進学者数は11名で初めて10%を越えた。また、本研究にかかわる支援プロジェクトについて3年担任との打ち合わせもおこなわれ、活動としての認知度を深めた。

課題としては、全体指導・個別指導を繰り返しても卒業の時点で進路未定の者がでることと、決定した者でも就職活動、進学準備に取り掛かる時期が遅いことが、教員へのインフォーマルインタビューにおいて指摘されている。また、女子に比べて男子に未定者や意識の低い者が多いということも指摘されている。

(3)プロジェクトのねらいと運営方法

本プロジェクトは酒井他(2004)で報告したように、学校のスケジュールで進路選択をおこなうのではなく、生徒自身のペースで大学進学を中心とした進路選択をおこなうことを支援するものである。具体的には、毎週2日程度放課後に大学生、大学院生がA商を訪問し、進路選択の相談や学習支援・試験対策支援を、希望する生徒に対しておこなうもので、以下の項目をねらいとしている。

- ・大学生の実態を肌身で感じる。
- ・進路にむけての時間を共有する。
- ・自宅学習にチャレンジすることを支援する。
- ・入試情報の検索と願書・提出資料の書き方や内容

づくりを支援する。

(4)参加生徒の状況

プロジェクトへの参加はオープンであり、授業、プリント、掲示を通じて誰でも大学生・大学院生に相談できることがアナウンスされていたが、実際には教員に個別相談をしたところ大学進学を勧められた生徒と、教員の側から大学進学を進路先として提示された生徒が参加している。したがって本研究でフィールドワークの対象となった生徒は全員が始めたきっかけを「教員に勧められて」と述べている。

しかしながら、本年度は昨年までと異なり一応は大学進学という志望を持っている者が多かった。

(5)とりあげたケースの概要

2004年3月に卒業した生徒5名と、2003年3月に卒業した生徒2名について報告する。氏名はいずれも仮名である(表1)。

4 データの収集方法

本プロジェクトでは、時期や年度により人数が違うが、毎年約10名程度のボランティアの学生ならびに院生が実際の支援活動にあっている。彼らは活動があるとその都度、その日の活動の内容を引き継ぎのための記録として書き上げ、メーリングリストで他のメンバーに送付するという作業を課されている。また、高校側担当のB教諭も詳細な記録を蓄積している。これらはすべて、調査として見ればフィールドにおける記録と見なすことが可能であり、本稿ではこれを「フィールドノーツ」と命名している。

また、これとは別に生徒には適宜本稿の執筆者らがインタビューを行い、進路決定までの意識や生活態度などを聞いている。なかでも進路決定後には各生徒に長時間のインタビューを行い、活動を通じてのボランティアとの関わりやそこで考えたことを詳しく尋ねた。記録は可能な限りテープやMDで録音し、それを起こした。

次節以降での生徒の事例報告は、すべてこの「フィールドノーツ」とインタビューに基づいて記述されたものである。また、活動場面やB教諭による指導場面での生徒の発言は、「フィールドノーツ」として記録されている。

表1 ケースの概要

	氏名	性別	出席状況・成績	参加前の進路志望
1	カズミ	女	欠席少・遅刻少、成績優秀	専門学校
2	*リエ	女	欠席少・遅刻多、成績普通	就職
3	*チハル	女	欠席多・遅刻多、成績悪い	フリーター
4	レイコ	女	欠席少・遅刻多、成績普通	専門学校か大学
5	マコト	男	欠席多・遅刻多、成績悪い	大学
6	ユウスケ	男	欠席多・遅刻多、成績悪い	「フリーターかな」
7	ヒロシ	男	欠席無・遅刻少、成績優秀	大学だが経済的に就職かも

*2003年3月卒業の生徒

5 チャレンジャーの女子

酒井他(2004)で指摘したように、A商の生徒の中には学校に対する帰属意識が低く、最も小さな努力だけで卒業さえできればいいという意識が強い生徒も少なからずおり、卒業後フリーターになるのもしかたがないという暗黙の了解が教員生徒間で共有されている。女子生徒の中には、「卒業したら結婚」と考えている生徒も一定数おり、また、家庭の経済的な事情などがある場合には「卒業後はキャバクラで働く」と公言する生徒もいる。保護者からも、「女の子で商業高校なんだから、お嫁に行くし大学進学しても無駄」、「大学に行ってもどうしてもやりたい勉強があるのでなければ就職したほうがいい」と言われている生徒も少なくない。本プロジェクトでは、そのような生徒たちに対し、大学進学に向けて努力するという価値を積極的に提示しながら、進路選択支援活動をおこなってきた。つまり、女性役割に応じた進路選択をしようとする生徒たちに対し、揺さぶりをかける活動であると言えよう。

先述のようにA商の生徒の男女比は1対4であるが、大学進学を勧められ本活動に参加した生徒の男女の数はほぼ拮抗している。だが、後述のように、男子の場合は、成績・出席・試験日程などの条件に鑑み、自己に見合った大学を選択するケースが多いのに対し、女子の場合、「チャレンジャー」とも呼べるような高望みともとれる進路(当初は教員から勧められたものである)に果敢に挑み、合格を目指し主体的に努力をするという姿勢が見られた。

ここでは、当初は受動的であった大学進学に対し、ある時点を転機として能動的に取り組むようになった

4名を事例として取り上げる。

(ケース1) カズミ

両親と中学一年の妹の4人暮らし。中学3年時は、あまり登校せず年間出席日数は50日、評定平均は2。担任に、「高校へ行けないから就職考えた方がいい」と言われ、すごくあせって必死に勉強してA商に入学した。

高校入学当時は、高校でも勉強にはついていけないだろうから、卒業さえできればいいと考えていたという。

中学校でさんざんな落ちこぼれかたをして、授業も全くわかんなくてだめだなーと感じて、高校とかも中学よりも難しいことやるんだから、中学(の勉強が)わかってないんだから、高校でもわかるわけがないよって思ってた。卒業さえできればいいなって思ってた。(2004年1月22日、インタビュー)

だが、高校入試のための受験勉強が効を奏してか、入学後最初の定期テストで高得点を取ることができ、それ以来、成績は上位を維持し、高校3年時には生徒会長も務めた。高校卒業後の進路について、母親からは、「女の子で商業高校なんだから、どうせお嫁に行くし大学進学しても無駄」、「銀行の仕事がいい」と言われ、1年時には就職志望だった。しかし、本活動の支援を受けた先輩がAO入試や自己推薦入試で大学進学を果たすのを見て、大学進学への憧れも抱くようになる。

三年生の先輩が卒業するときに、先輩が中央大学に行ったんですよ、その年。中央大学に行って、中央大学って何かわからないんですけど、担任の先生も中央大学ってすごくいい学校だって言って。担任の先生は中央大学卒だったんですけど。中央大学はいいぞって言って。じゃあ頑張れば行けるのかって簡単に考えちゃって。

(2004年1月22日、インタビュー)

一方で、好きな絵を続けようと、デザインの専門学校への進学も考えていたが、友人の描いた絵を見て自分の才能のなさを実感し、専門学校でやっていく自信を失くす。3年に進級した当初は、高卒後すぐ就職し一生働き続けていくという将来にも「ぴんとこない」という理由で、消極的な選択として「情けないだけ

ど進学」を目指すことにした。

Wさん(絵が上手なカズミの友人)には絵の道しかない。(略)でも、(わたしは)専門はやってく自信がないし、就職もぴんとこない。一生働かなきゃだから。それで情けないんだけど進学にした。

(2004年2月、インタビュー)

カズミは、3年生の5月から本活動に参加しているが、その時点では、公務員試験を受験するか大学受験をするかで揺れていた。6月半ば頃に、公務員をやめて大学進学にすると決め、その時から、大学生ボランティアに対しては、「早稲田大学を自己推薦入試で受験する」と伝えていたが、志望校の選択は、自分の意志というよりも「B先生と相談して決めた」もので、B教諭に勧められるがままの受動的選択であった。カズミは進路決定後に、この時の気持ちを次のように語っている。

B先生に相談して、どこがいいとか。最終的に自分で決めた。B先生が早稲田いいっていうからそうかなと思った。でも受かるわけないって半信半疑で。先輩たちに悪いけど、A商から早稲田受けるって言うって何考えてるんだらう?カネの無駄だよと思って。(略)早稲田受けても無理じゃんみたいな。自分がそういうふうにならう(=早稲田を受験するように)言われるようになって、今年は私だと思って結構憂鬱だったんですよ。

(2004年1月22日、インタビュー)

だが、憂鬱という気持ちの反面、早稲田大学に対する憧れも強く抱いており、複雑な気持ちが交錯していたといえる。カズミは、A商で行われているボランティア活動に、高校1年の時から積極的に参加し、そのボランティア活動が母体となって設立されたNPOでも中心的な役割を果たしてきており、高2の秋には、早稲田大学社会科学部のS先生のゼミを訪問し、活動報告を行っている。カズミはその時の感想をNPO便りに次のように記している。

早稲田大学社会科学部のみなさんのゼミに参加させていただきました。NPO設立にあたり、学校・部活・生徒会などとボランティア活動を巡る様々なトラブルがあり、その事を説明したり、それについての意見を伺ったりしました。(略)その他には現在の

活動（年3回のパソコン講習会・社会教育会館でのパソコンボランティア・カンボジア訪問・訪問サポートなど）と、NPOが抱えている理事不足や資金不足などの問題点、それについての解決策をいただきました。高校では決して得ることのできないような貴重な事をたくさん聞く事ができ、とても有益な時間でした。この経験を生かしてこのNPOをますます盛り上げていけたら良いと思っています。

（2002年11月27日発行、NPO便り）

この経験もあり、カズミ自身は社会科学部を受験したいと思ったのだが、成績が基準に及ばないなどの理由もあり、教育学部を受験することになった。だが、あまり乗り気ではなかったという。

最初は教育はいやだったんです。「先生」って感じがして。最初は社会科学部に入りたかった。でも成績が足りなくて、教育になった。（略）先生にはなりたくなかった。中学にはいい先生がいなかったから。

（2004年2月、インタビュー）

そのため、1学期の間は活動の場に来て、生徒会の仕事をしたり塾の英語のプリントをしたりしていて、あまり積極的ではなかった。

また、一方で、進路指導部の進学担当の教員（C教諭）には指定校推薦で大学進学することを勧められており、「（指定校で簡単に入学できたとしても）A商の英語は中学生レベルだから大学に入ってから大変だ」と考え、先走って塾に通い英語の勉強を始めた。塾では、先生にセンター入試を受験するよう勧められ、毎回多くの宿題を課せられたため、カズミは、夏休み中に活動に参加した際にも、塾の夏期講習の宿題や予習をやる事が多く、B教諭から課せられていた自己推薦入試受験のための資料作成の作業は捗らなかった。だが、B教諭に「誰についていくのか決める」と決断を迫られたことをきっかけに、指定校推薦は受験せず、早稲田大学受験に向けて頑張ると決意表明した。

塾の先生は、（カズミに）センター入試を受けさせたいそうで、頑張らなきゃいけないとはっぱをかけられているので、塾の宿題をやらなきゃいけないという話をしていたところへ、B先生がやってきて、（カズミに対して）「おまえ、全部はやれないんだから、塾の先生の言うことと、C先生の言うことと、おれの言うことと、全然違うことを言っているんだ

から、誰についていくのか決める」というようなことをおっしゃっていました。カズミさんは、迷わず「B先生についていきます」と即答していました。

（2003年8月8日、フィールドノート）

それでも、夏休みが終わり10月最初の文化祭が終わるまでは、進路のことに専念できず、「文化祭が終わってからようやく目を覚ました感じで、進路のことで焦り始めた」という。それから願書締切りまでは、十日あまりしかなく、毎日遅くまで学校に残って出願のための資料作成などに取り組んでいたが、「一番初めに願書提出したときはあんまり乗り気ではなかった」し、自分が受験する学科についても「願書提出するまでは生涯学習のことは全然知らない」という状態だった。

だが、願書を作成する過程で、これまでの高校生活の中で経験させてもらってきた数々のボランティア活動について振り返り、多くの人との出会いの機会を与えられてきたことや、大学生ボランティアやB教諭が応援してくれていることを実感し、「頑張りたいな」と感じたという。

願書の資料集めしてる間に自分が今まで何をしてきたか振り返るんですよ。S先生にすごくお世話になったり、パソコン講習会とか。恥ずかしいけど一番思い出したのはB先生だった。一番お世話になったのはB先生で。私はこんなに機会をもらっている人に会って、いろんな事をして、最終的にB先生が私が大学に願書を出して合格することを応援してくれてるんだと思ったら頑張りたいなと思ってきて。

（2004年1月22日、インタビュー）

そして、本格的に小論文の練習などを始め、自分が受験する学科である生涯教育について、大学生ボランティアと一緒に、インターネットで調べたり専門の本を読んだりすることにより、これまで自分が関わってきたボランティア活動につながる勉強が大学でできることを知ることができた。この気づきがカズミにとって最大の転機となり、その後、受験勉強に向けて積極的に取り組みむようになっていった。

願書出した後に生涯学習について（大学生ボランティアの方に）いろいろ教えてもらって、その時から本も読まなきゃっていう気持ちになった。自分が関わっているNPOの分野のことについても、（出願

する時は)ただ書類を集めるだけで、全体像はつかめてなかったんですけど、でも、願書提出して、小論文の練習とか始めて、社会教育って自分が今までやってきたこととリンクしてる、自分が関わっているNPOともつながっているってことがわかって、分野として(社会教育が)好きになった。それで、社会教育主事になりたいって思って、社会教育主事に憧れるようになった。(略)(インターネットを一緒に見ながら、大学での専攻(生涯教育学)を生かせる仕事として)こういうのがあるよって教えてくれたのは、Kさん(大学生ボランティア)。だから、「これはいい!」って思った。それで、社会教育主事になるっていう将来の目標は遠いけど、それに近づくために、まず、今頑張っって大学に入ろう、って思った。目標があるのとないのとって、違うじゃないですか、「これになるから頑張るぞ」って言うのがあったから、頑張れたんだと思う。

(2004年9月3日、インタビュー)

一次試験合格後は、ほぼ毎日のように活動に参加し、専門分野の本を読んだり、かなりの専門性を要求される小論文の過去問題にあきらめずに取り組んだりする姿勢を見せ、その結果、早稲田大学に合格した。

(ケース2) リエ

両親と弟の4人家族。自営業でそれほど経済的な余裕があるわけではない。進学に関して母親は、多少の無理をすれば出せないこともないが、大学に行ってもどうしてもやりたい勉強があるのでなければ就職したほうが良いと言っている。評定値は3.0。一年生の時は、「進学とかは全く考えていなくて、絶対就職」と思っていたが、2年になり「すごい遅刻が多いので、就職できないな」と思っていた頃、B教諭に「おまえも(進学に)するか?」と言われ、就職は無理だからという理由で進学を希望した。3年の5月から塾に通い始めたが、勉強の仕方が分からず、B教諭の勧めで本活動に参加。

高校に入った時は、いっぱい資格をとろうと思って、商業の。でも全然取れなくて。すごい遅刻が多いので、就職できないって思ったんですよ、2年生の終わり頃。こんなに遅刻が多くて、絶対私は就職無理だと思ったんですよ。で、B先生が(「おまえも進学にするか?」)と)言ってたから、あーそうか、進学かって。でも、うちの学校は進学校とかじゃな

いし、勉強とかも全然…。

(2003年3月11日、インタビュー)

活動開始時、進学という方向性は決まっていたものの、なかなか自分から動くことができず、志望校について「自分のことなんだから自分で探しなよ」というボランティアの言葉に対して「そう思うけど、何していいか分からないから何か指示して」と答えるような状態だった(2002年10月3日、フィールドノーツ)。活動の進行とともに、次第に志望校選択にも受験勉強にも積極的になっていき、大学へ行きたいという気持ちが「どんどん強くなっていった感じ」だったという。

しかし一方で学習習慣が身についておらず、勉強に集中できなくなった時期があり、母親から「そんな態度なら(塾を)やめれば」と言われたことで塾をやめたりもしている。

(塾やめちゃったじゃない?あれ、結局なんでやめちゃったの?)

ちょっと勉強に身が入らなくなってきちゃって、ずっと英語ばかりやって。受験勉強だから、多いわけじゃないですか、やるのが。全然できなくて。ちょっとなんか、お母さんが、「そんな態度なら(塾を)やめれば」って。

(2003年3月11日、インタビュー)

また、家計への配慮も常にあり、「おねえちゃんが大学行くなら自分は行かない」という弟の言葉に考え込む様子もみられた。

リエさんの弟は「おねえちゃんが大学行くなら自分は行かない」と言っているらしい。おねえちゃんが行かないなら行くらしい。リエさんの弟は家のお財布を気にしているのだろうか。

(2002年10月30日、フィールドノーツ)

11月、第一志望の駒澤大学を受験中に国士舘大学の願書を出そうとしたが、「(何校も違う学科を受験して受験料を無駄にして)やりたいことがはっきり決まっていなかったら進学しないほうが良い」「駒沢がダメなら就職しなさい」と両親に言われ、受験料をもらえなかったために出願できなかった。その後、駒沢が不合格となり、本人は進学か就職かで深く悩む。その際、一昨年度に生徒として本活動に参加した先輩と進路について話し合ったことが、リエにとって転機となった。

この時、先輩に「働きたいかもう少し勉強したいか」と聞かれ、「もう少し勉強したい」と思ったという。

親が駒沢落ちたら就職と言っていて迷ったけど、先週、先輩と話した時に「働きたいかもう少し勉強したいか」と言われて「もう少し勉強したい」と思ったそうです。

(2002年11月15日、フィールドノート)

リエは、中学校の時にあまり熱心に勉強に取り組まなかったことや、高校に入ってから「資格をたくさん取ろう」と思いながらも取ることができなかったことへの後悔の気持ちをずっと持ち続けてきている。大学進学は、リエにとって、これまで果たせなかった勉学に再挑戦するチャンスであったといえよう。

(高校に)入ってからこの学校は絶対私には合っていないと思って、もっと勉強しておけばよかったって後悔した。(中略)(大学では)卒業した時に後悔しないように、勉強しとけばよかったと思わないように、勉強したい。

(2003年3月11日、インタビュー)

また、先輩から、二部にすれば学費が半額になることを教えてもらい、両親にそれほど経済的負担をかけずに進学する道もあることを知り、それまで考えていなかった二部の受験を決心する。

(駒沢が不合格になった時は)なんかもう、結構何校か落ちて、受験料も無駄にしてるし、親にも反対されて、本当にどうしようかなあと思って、でも、行きたいし。っていう時に先輩としゃべってて(略)二部とかも全然考えてなかったんですよ。でも、先輩が、「私みたいに二部にして、学費半額だし、昼間働けるから、親に負担かけないためにも二部にして…。本当に行きたいんだったらちょっと考えてみな」って言われた。それで、なんかその話を聞いて決心がついたというか、これを最後にして、最後のチャンスに親にもらって、これでだめだったら諦めようって。(2003年3月11日、インタビュー)

そして、父親に「これを最後に受験させてください」と頼み込み、受験までの日程も差し迫っていたのだが、願書(志望動機)の作成、面接の練習、小論文の練習などに前向きに取り組む、東洋大学二部に合格

した。

(ケース3) チハル

母、弟、妹、妹の子どもとの5人暮らし。父母はチハルが小学生の頃離婚。母は病氣療養中で、妹の子どもが幼いため、長女として家族を支えてきた。成績はクラスで後ろから数番目、欠席や遅刻もクラス1多く、成績判定会議でいつも名前があがる生徒である。「高校さえ出てくれれば」という親の期待に応えようと必死に頑張っており、3年生の9月当初には、「(友だちとは)“どうする?”“フリーター”“どうする?”“フリーター”(と話している。)(自分は)化粧のバイトがしたくて、美容部員がしたい。」と語っていた。

だが、一方で、「母親の面倒はずっと見ていきたい」、「母がまた悪くなった時に役に立ちたい」「母親の気持ちがわかるようになりたい」から心理カウンセラーになりたい、という希望を高2の頃から語っていた。その頃からB教諭に「看護婦からの道もあるから」と諭されて、興味は感じていたが、金銭的な負担、学業面での努力不足、学校での達成度の低さ、といった諸々の要因から、「わたしには無理だから」と無視しつつ、高3の2学期に至る。本活動への参加も、「(B教諭に)勝手に進路を決められて」「行けて(言われて)、(ボランティアの大学生との)連絡をとる係になって」であり、主体的な選択というよりむしろ関係への強引な包絡の結果である。

活動に参加し始めてからも、看護学校への見学、中学校レベルからの数学の復習などの課題を設定されれば、その場その場では積極的に取り組むものの、「(理科の授業の)カイコの解剖も途中で投げ出したのに、(看護の実習なんて)わたしには無理」「テスト勉強自体したことないから、どうやればいいんだろう?」と自信のなさや不安を口にし、何度も受験から後退する姿勢を見せる。

看護学校見学の感想を聞くと、「無理かも」と言っていた。「血とか無理。私カイコの解剖も途中で投げ出したもん。授業なのに。」と自信なさそうだった。

(2002年9月26日、フィールドノート)

最初はただ(看護学校受験のための)勉強しなくて、(略)やっぱしなきゃいけないでしょ、テストがあるから。そんなすぐ入れるようなところじゃないから。それが嫌で。テスト勉強自体あんまりしたことなかったから。どうやればいいんだろうって感じで。

で、まいったかと思って、ずっとシカトしてたの、先生を。(2003年3月14日、インタビュー)

だが、その度にボランティアやB教諭がメールで頻繁に連絡を取り続けたところ、ボランティアとの関係を断ち切ることに、受験から完全に降りてしまうことには踏み切れず、また活動に参加し、周囲の人に見守られ丁寧に指導してもらえば集中して課題に取り組む姿勢を見せた。

チハルさんには、わたしの家庭教師用の数学の問題集(中学1・2年用)の正負の数の計算をやってもらうことにした。(略)チハルさんは整数の計算の時は順調で、「バカにしないでよお」と得意げに言っていた。しかし答え合わせをしてみると2問間違っており、「弟にバカにされる〜」と苦笑していた。しかし分数・小数の計算になると「分母のそろえ方がわかんない」と言ってつまってしまった。(略)チハルさんは、計算のスピードは遅いものの二時間ほど集中して解いており、集中力はとてもあると感じた。

(2002年12月12日、フィールドノーツ)

チハルは、この時の気持ちを、進路決定後のインタビューで次のように語っている。

(お茶大生と話してて、進路のこととかの考えが変わったところはあるか?)

えー、どうだろ。変わったっていうか、自分に関わってる人が増えると、その人たちのこと考えようって思うじゃん。なんか、勉強見てもらって落ちちゃったら、ちょっとかわいそうかなとか微妙かなとか思うじゃん。なんか…。

(悪いとか?)

そうそう。せっかく見てもらってたのにみたいな。

(2003年3月14日、インタビュー)

だが、2学期も終わり頃になり、本活動に参加した生徒たちのほとんどが年内に進路を決めた後、3月の看護学校受験を控えたチハル一人が取り残された形になってからは、学校も欠席しがちになり、ボランティアがメールを送っても返事が来なくなってしまう。ボランティアがチハルからの連絡を待ってまた活動日を設定しようとしていたところ、B教諭からチハルに対して「(チハルを)3年間見てきて看護婦を勧めている

んだから(自分の将来を真剣に考えるように)」「興味があるんだったら、それでやる気ができるんだたらいろいろ手伝ってやれるから」という説得があった。それを聞いてチハルは、「そういう(自分の将来を真剣に心配して助言と助力をしてくれる)普通の人は周りにはいないかなあ」「ありがたい意見かな」と思い、「やると決めたらやりたいの。」「勉強するって決めたら全部それに使いたかったの、時間を」という気持ちになったという。

先生達に、ちょっと説得されたの。K先生とB先生からとふたりに。説得されて。うちの周りって結構、親とかもそうだけど、精神的にちょっと弱い人ばっかだから、そういうちゃんと職に就いてて、おまえのこと2年間も3年間も見てる人はそういないだろうって。うん、そりゃあねって。で、そういう人たちがおまえは看護とかに行ったほうがいいって言ってるぞって。別に考えなしで言ってるわけじゃなくて、向いてないと思ったら勧めないし、そういうのに興味があるんだったら、そうやったほうがいいみたいな。それでやる気が出るんだったら、いろいろ手伝ってやることもできるみたいな、ことを言われて、そうだよなあ、テン・テン・テン(…)みたいな。そうですよねえ、と思って。そういえばまあそういう普通の人は周りにはいないかなあって思って。ありがたい意見かな、とか思って。でなんか、やると決めたらやりたいの。(略)で、だから、勉強するって決めたら全部それに使いたかったの、時間を。家のこととか気にしないで。

(2003年3月14日、インタビュー)

B教諭からのこの説得がチハルにとって真剣に受験勉強に取り組む転機となり、チハルは冬休み中ほとんど毎日登校し、B教諭と二人で数学と国語の問題集や作文の練習という課題に取り組んだ。だが、その矢先の母親の入院により、「どっちをとるか言ってたら家のことでしょ。やっぱ。」と家族を優先させ、また受験を諦めかかったのであるが、その際にも、B教諭からの「これから山谷あるだろうけど、協力するから頑張りなよ」「自分が頑張る時だから我慢しなよ」(2003年1月7日)というメールでの励ましがああり、3月の看護学校受験にこぎつけた。不合格となったものの4月からは某大学病院で看護助手として勤務し始め、以来1年半継続して勤務している。

(ケース4) レイコ

父方の祖父が中国残留日本人、祖母は中国人。レイコは、中国残留孤児二世の父と、中国人の母の間に中国の黒龍江省に生まれた。その後、父母は離婚し、レイコが8歳の時に、父方の祖父母と父とレイコの四人で日本に永住帰国。父は中国にいた時に事故に遭い、身体に障害があるため、祖父母がレイコの実質上の保護者であり、レイコが「親」と呼ぶのは、祖父母をさす。レイコは、8歳で来日した後、小学校1年に編入したが、数ヶ月で転居し、転校。転校先の小学校では3年生に編入させられたため、それ以来ずっと勉強がわからず、友人もあまりできないまま、中学校までを過ごした。授業以外の時間は、家で家族と過ごすことが多く、家庭では祖父母と中国語を話し、暇な時には中国のビデオを見て過ごすという生活をずっと続けてきており、読み書きはできないものの中国語会話はできる。最近はあまりそうでもないけれど以前はよく「雰囲気は中国人っぽい」と言われたそうで、自身も「わたしは中国人」「自分は日本人じゃない」という意識を持っている。

小学校の頃から「日本語がしゃべれない」ことを理由にいじめられたりしており、「毎日が嫌。(学校へ)行くのが嫌」だったが、「まだ小さいから、今年は学校行かなきゃいけないんだ」と思い、病気のとき以外は、学校にはきちんと通っていた。

レイコの家族は、中国では農村部で暮らし、農業で生計を立てていた。その村では、高校進学し、村から出て都市の大学に進学して都市で就職するのではなければ、一生村で畑仕事をやっていくのが当たり前だったという。そのため、レイコと家族は、「(高校は行かないと)将来が無駄になっちゃう。」「高校入って卒業したら何かはできる。」という、学歴が安定した将来につながるという価値観を、国境を越えて持ち越してきている。

(でも、高校には行くって思った?)

それは行かないと、ダメじゃないですか。将来が無駄になっちゃう。一応、高校は卒業したいかな…

(って思った?)

だって、行かなきゃやることないですよ。フリーターなんてみっともない。周りから見て。いやです、それはいやです。

((親から)「高校行きなさい」とかって言われた?)

言わない。普通に、親としても、あたしとしても、

高校行くのは当たり前みたいな。行かないと何もできない、社会が受け入れて…認めてくれない、っていうのもあるから。学業として、高校入って卒業したら何かはできる、一応高校は行かなきゃな、みたいな。(2002年7月15日、インタビュー)

だが、レイコがいとこたちの中でも一番年上で、親戚の中で最初の受験生で、日本の高校入試の状況がわからなかったこともあり、「商業って何をやるのかとか(わからなかったが)、とにかく行けるんだったらいいやって、入れるんだったらどこでもいいや」と思い、「自分のレベルに合わせた方が入っても苦労しない」という理由で、A商に進学する。

高校卒業後の進路については、高校2年の頃までは中国語の専門学校を志望していたが、中国語を勉強するのなら四年制大学の中国語学科に進学した方がよいのではないかというB教諭からのアドバイスもあり、3年進級時には大学進学を志望。

レイコは、3年生の初め頃から、B教諭に、「大学受験を目指すのならば、自己推薦入試のセールスポイントとすることができるよう中国語検定を受け、合格に向けて勉強をするように」、また「小論文の練習をするように」と再三促されていた。だが、1学期の間は活動に参加し課題に取り組むということはなく、B教諭が中国語検定やオープンキャンパスの資料を渡すために活動の場に呼び出しても、それを受け取るだけで、用事がすめばいつも「今日は忙しいからまた来ます」と姿を消していた。

先生、(中国語検定の)願書ありがとうございます。今度はまじ受かりたいから頑張ります。小論文というより私は漢字苦手だし、まず自分で漢字やりたいし、中国語の勉強もしなきゃだから忙しいの。だから、(小論文指導に)出たいんだけど、今日はちょっと忙しいんで、また来ますから。

(2004年4月7日、フィールドノート)

また、ボランティアと一緒に中国語の勉強をすると約束をしていますが、真面目には勉強に取り組もうとしないことが度々あった。

レイコさんとは、中国語の勉強をするという約束をしていたのですが、三人(活動の場に参加していた3年生たち)でクラスの友だちの噂話をしていて、なかなか勉強を始めようとしていませんでした。

カズミさんが途中からおしゃべりをしながらも英語の勉強を始め、レイコさんに「レイコうるさいよ、勉強しなよ」と言い、ようやく勉強を始めるという感じでした。

(2004年6月28日、フィールドノーツ)

レイコは、「英語が苦手だから」という理由で大学受験を躊躇するようなことをしばしば口にするものの、親からは「専門(学校)はだめ」と言われており、自身も大学進学しようという気持ちはある様子だった。だが、自分の成績が出願基準を若干上回っていて、なおかつ中国語が話せるのだから、第一志望のM大学中国語学科の公募推薦入試には合格するはずであるという希望的観測を自分なりに持っており、小論文の練習をしたりしなければならないという必要性を自分の課題としては感じられないでいた。

私、成績3.3でしょ。M大の(推薦入試の)基準は3.0だから大丈夫だよ。それに(これまで推薦入試では)1人しか落ちてないしー、平気でしょ…(略)…大学生に作文見てもらいたいけど、なかなか時間なくて。でも受かるよね!面接で中国語話せますとかアピールして、願書なんかに(中国語が話せることを)書いてもらえばいいよね。

(2004年6月6日、フィールドノーツ)

このような受験に向けての取り組みを全くしないという状態が夏休み明けまで続き、レイコが実際に活動に参加したのは、出願まで3週間という差し迫った時期になってからである。本人の余裕のある言葉とは相反して、いざ出願書類の志望動機を書くとなると、何を書いていいかわからず、大学生に大学案内に書いてある内容を説明しポイントを示唆してもらっても、なかなか言葉が出てこなかった。大学生ボランティアと一緒に一文一文を書いていくという方法でようやく書き上げることができ、レイコは、この経験により、小論文を書くことが思っていたよりも大変であることを実感した。それから何日か続けて活動の場に顔を出したが、大学生と、学生生活や友人関係について話し込むことに熱中し、実際に小論文の練習をするのはわずかな時間だけということもあり、受験が差し迫ってもあまり緊迫した様子はいかたがえなかった。また、ボランティアが土曜の活動に参加するかどうかを確認するメールを送っても、いつも「B先生に聞いてみる」という返事が返ってきて、主体的に勉強に取り組むとい

う姿勢は見られなかった。

試験では、面接で経済新聞を読まされて全然読めなかったというものの、「(過去の入試では)一人しか落ちていないから大丈夫だよ」と依然として楽観的な様子だった。だが、結果は、不合格。「受かるよね」と何度も教師や大学生に確認を求めていたレイコにとって、この不合格はショックが大きく、当初は、「落ちたのは(私が)中国人だから差別されたんだ!だって1人しか落ちてないのに私だけなんておかしい、日本人はずるいから、(私だけ)落としたんだ」と不平を述べていた。だが、B教諭に「6月から(小論文の練習を)やれって言っているのに、10月に1回しか来ないで、書いた作文はたったの6枚なんだから、その範囲で努力したことは認めるけど、もっといっぱい頑張ったやつはいるんじゃないか?そういうやつには負けてしょうがないんじゃないか」と言われ、何かを考えこむ様子を見せていた。また、自分が不合格になった理由が、「中国語が話せるからと言って軽い気持ちで入学しても、日本語の理解力や学習意欲の点で続かないことがある」ためであることを知らされた時には、大学生ボランティアが何を話しかけても何の返事も返ってこないほど黙りこくってしまった。

それまで、「中国語が話せるから、他の日本人の受験者よりも有利なはず」と信じて疑わなかったレイコにとって、中国語が話せることをプラスに評価してもらえるわけではないと知ったことは、不合格と同じくらいの衝撃であったと思われる。

レイコはこの不合格を転機に、1ヵ月後の同じ大学の自己推薦入試の受験に向けて、熱心に準備に取り組むようになった。それまでは、B教諭に言われるから活動に参加するという受動的な言動を見せていたが、大学生ボランティアがA商に行けない日でも「一人で行って勉強する」といった積極性を見せるようになった。また、以前は、大学生ボランティアの指導にも真剣には耳を貸さず、勉強よりもおしゃべりを優先させるという態度であったが、不合格のあとは、自分から積極的に「これをやるので教えてください」と言うようになった。その結果、二度目の受験で合格、入学後は、専門の中国語だけでなく、日本語の勉強にも励んでいる。

6 呪縛の男子

A商の男子の中には学力や学習への構え、生活や行動と関係なく、いわゆる遊びモードの生徒のなかにも「いまどき、男は大学進学」という価値観のなかで、

本人が主体的に進路選択をおこなうというよりは、呪縛的に進路が方向付けられる傾向の生徒がみられる。

これらの男子生徒は、進路調査の早い段階から大学進学希望の意向を示すものの、そのための勉強や準備はしない。従来、進路多様校のこのような男子たちは具体的な志望校が決定しないまま卒業したり、準備なしに一般受験して不合格になったりして、進路未定者やフリーターとなっていった。

しかし、このような生徒たちに進路選択支援をおこなえば大学進学は実現する。本プロジェクトでは、昨年度までは男子の参加が少数であったが、本年度はより多くの男子生徒が活動に参加してきた。男子が多く参加した要因としては、本年度の男子は20名あまりで、大きく2つのグループに分かれていたことによる。グループの一方はサッカー部員とその友人で構成され、部の顧問の女性教諭が熱心に進学を勧めた結果、グループ内で進学するために少しでも小論文や面接対策をしようという意識が高まり進路選択支援の活動にも数名が参加した。もう一方のグループは相対的に成績優秀な生徒が所属するほぼ同一クラス内のグループだが、担任も含め特にかかわった教師がいなかったために、指定校への大学進学から就職・未定まで様々な進路選択をおこなうとともに未定率も相対的に高くなった。

ここでは前者のグループに属する3名を事例として取り上げる。

(ケース5) マコト

マコトはA商から徒歩15分の高層都営住宅に家族5人で住み3人兄弟の長男、小中学校ともに地元である。小学校からカブスカウト、中学でボーイスカウトと活動しボランティア経験や異年齢集団との交流経験が豊富である。

中学卒業後、一度、他の高校に入学するが怠学により1年生の途中で中途退学し、A商には1年遅れで過年度生として入学している。3年間めんどろくさ担任はマコトを評して、「あいつはとにかくめんどろくさがり、なまけ者なんです。頭だって悪くはないのに努力しない、朝は起きられない、授業にあきたら帰っちゃう、要するに我慢のができない。だから、中学のときの友達なんかにもばかにされてるんですよ。」と述べている。

進路指導部がおこなった進路志望調査ではマコトは、一貫して大学進学を希望している。その理由について進路指導部のB教諭には、商業高校だから商学部

と語っており就職は考えていない。

おれ、(ボーイ)スカウトの友達とか先輩とかみんな大学行ってるんですよ。それでやっぱり自分もいくなら大学。で商業だから商学部かなって。だぶぶてるしバカにされたくないっすから。

(2003年5月15日、フィールドノート)

実際の進路選択の過程については、卒業までの1年間マコトは、進路決定に向けて、ほぼ学期毎に決意→挫折→反省→決意というサイクルを繰り返してきた。そしてそのことを進路指導部の進学担当、支援の大学生・院生に、何度も表明している。4月の新学期当初には、B教諭に対して「先生、おれ今日まで(3日間)遅刻してないんだ。この調子で頑張るから、今度はすごいやる気あるから、たのむよ。」と話していたが、翌週から遅刻がはじまり6月の終わりには学期欠時オーバーとなり、卒業見込みの調査書の発行が保留されることとなった。このことを担任から言われたマコトは担任に、「おれ2学期から頑張るから、みててよ先生。」と表明し、B教諭にも再度、頑張る決意を告げている。

先生、2学期は大丈夫だから、信じて。大学いきたいからさ。でも自分で何したらいいかわからないし、夏休みもどうすればいいかわかんなくて遊びそう、てか、遊びも必要だしバイトもあるし…(略)…でも、おれ、やる気、超あるから、なんかアドバイスしてよ、先生

(2003年7月11日、フィールドノート)

そこで、小論文指導に参加することを勧め夏休み中は、5回指導に参加したが、大学生が書く内容などを指示しても自分なりの構成に固執したり、勝手に「じゃあ家でやってきます」などと言っては、おしゃべりに夢中になっていた。また、友人と支援の大学院生をキャンプに誘うなど受験生の決意はまったく感じられない言動や行動もみられ、休み前の決意との一貫性がまったくみられなかった。

2学期も1学期の繰り返しで、10月早々に再び欠時オーバーが出て、年明けまで調査書の発行ができないこととなり、推薦入試には出願できないことが決定的となった。したがって10月以降は学習支援活動の場にはたまに顔を出すものの、やや居づらそうにおしゃべりをして帰るような状態であった。

年が明けて2月に何とか卒業が決まると、進学では

なく就職試験を受けることとなった。保護者の経済状態を危惧して、夜間に通学できる就職先を探したのだった。しかし、結果は不合格。ここで「もうフリーターでいい」という語りもでたが、担任の勧めもあり大学の夜間主を受験し、受ければ昼間バイトするということとなった。この間は活動の場に顔は出すものの活動にはほとんど参加しなかったが、試験直前に面接練習をおこなった。

大学生の人たちにはすごい感謝なんですよ。おれみたいなちょっとときと一な奴にも、ちゃんとめんどろみてくれて、担任もいい先生だけどそこまではってかんじだから。でちょっと（気が引けて）出れなかったけど、まじ、がんばるからさ、みててよ
(2004年2月20日、フィールドノーツ)

結果は合格で、現在は大学の2部に通いながら夜中に居酒屋の厨房のバイトをおこなっている。

(ケース6) ユウスケ

ユウスケは、家が呉服問屋を営む自営業で、私立高校から駒沢大学に進んだ兄との二人兄弟。両親としては、高校受験は失敗したが兄と同様、大学進学してもらうことを望んでおり、6月時点から進路希望調査では大学を希望していた。

しかし、夏休みに入るまで具体的にどの大学をどのような受験方法でなどは考えていなかった。そのことを心配した担任が電話で学校に呼び出して、進路担当者の方から高千穂大学のAO入試の起業・事業経営コースで受験することを勧められ、「おれ別に家は継ぐ気ないんです」というのを、とりあえず入学の手段だからと説明され、志望校が決定した。

大学はよくわからないし、入れればどこでもいいんだけど、うち継がなきゃみたいなのは、そんな気ないんで無理ですけど、入試のときだけの話ならそれでもいいす。とにかく楽に入れる方でよろしく。

(2003年7月28日、フィールドノーツ)

この入試は、家業を継ぐ意志のある者が受験資格の1つであり、志望理由書・保護者の同意書、作文のほか面接が課せられる。ユウスケは夏休み中に、学校見学、志望理由書の提出をおこないAO入試のエントリーを済ませたが、9月からの週2回の活動には試験の直前まで、教員が参加を促しても積極的に参加する

ことはなく、特に努力しなければという意識もなく、どちらかといえばなあなあという様子であった。

ようやく試験の2週間ほど前になり、活動に本格的に参加するようになったものの、数回の指導で本番の試験を迎えることとなった。準備できたのは、志望動機の作文練習と基本的な面接対策だけであったが、B教諭の「準備は大丈夫かい？」の問いに本人は至って楽観的であった。

作文とか今までで一番やって、何度も練習したからばっちりだから！面接も練習してもらって、かつことかもダサいけどちゃんとしてくから、楽勝ってかんじ。でも少し心配だけど、気合で何とかかなと思う。
(2003年10月2日、フィールドノーツ)

しかし、試験終了後、報告に来たユウスケは、「面接で髪型を注意されてショックだった。なんで教えてくれなかったんだ？」と訴えた。実際はそれらの注意は事前に再三にわたり、大学生、教員からされていたが、それに対してユウスケは「楽勝だからまかせて」「わかっているから」などと答えるものの真剣には捉えていなかった。面接で指摘を受けた髪形についても、床屋に行くように大学生・教員で説得させて行かせたものの見た目はほとんど変わらないような有様で、大学には入りたいがそのために自分が努力することや我慢することが、一般的な考え方としては理解できても自分の行動としてはできないのであった。

それでも結果は合格、本人は大喜びで「あんな（髪形の）こと言われて、絶対だめだとおもったけど、よかった！（入学したら）がんばるから！」と大学生や教員に言ってまわっていた。

(ケース7) ヒロシ

ヒロシは母子家庭で経済的には厳しい状況であるが、母親は3年生4月の時点で「本人がきちんと『大学に行かせて欲しい』と頼んでくれば、行かせてあげたい」と担任には話していた。一方、本人は1年のときから成績優秀で、担任との面接では、一応、大学進学希望であるが、経済的にきついことを心配していた。

どこかある程度いい大学に行きたいけど、経済的に厳しいと思うから、奨学金とかもらって頑張りたいと思う。指定校が楽でいいけど自分の成績じゃ駒沢は（上位の生徒がいるので）無理だから、どこか推薦で入れるとこ受けたいと思う。

(2003年4月30日、フィールドノーツ)

5月の進路希望調査でも大学志望であったが、7月には学費のこととで母親と揉めて、進学を放棄し就職希望となる。しかし、求人票閲覧といった就職に向けての具体的な活動はしないまま夏休みに入り9月を迎えた。

母親が金ないっていうから、もう大学は行かない。(お金のことで)ほんとにむかつくから、卒業したら世話になりたくないから、就職して金ためて大学行こうかって思ってる。

(2003年7月11日、フィールドノーツ)

2学期になって、就職と言いながらも、担任には「働きながら大学行くとか、卒業して1年間きっちり働いて金貯めて大学行く」などと語った。その一方で、担任が「親にきちんと大学行きたいとお願いしてみろ」と言っても、「そんなのは嫌だ、頼まれれば行ってやる」と答えている。

その後、担任も保護者に2、3回電話するなどして徐々に親子間の対立は母親の方が歩み寄るかたちで解消され、11月に千葉商科大学を推薦入試で受験できることになった。

べつに自分は(大学は)どうでもよかったんだけど、結局、母親も行っていいというか、行って欲しいみたいな感じでいうから、行くことにした。でも、経済的には楽じゃないことわかるからバイトとかも少しはしたいと思う。

(2003年11月5日、フィールドノーツ)

そして、数回、小論文指導や面接指導に参加したが、その中では、1学期にみられた自信は消失し、「おれ、昔から作文は苦手なんですよ、ほんとに受かるかな」と不安を募らせていたが、結果は無事に合格した。

7 進路多様校における進路選択の性差

5節での転機を乗り越えるチャレンジャーとしての女子と6節で指摘している積極的な転機のない呪縛の男子という差異はどのような構造であるか検討する。

A商における2004年3月の卒業生の2003年6月時点での男女の進路希望未定者と卒業時の進路未定者を比較すると、女子の未定者数は、36名から29名へと7名減少しているのに対して、男子は、12名から11名へと

1名減少しているのに過ぎない。女子の方が3年になった時点で未定であっても最終的に進路選択をおこなう割合が高いことがわかる。

つまり、未定の女子は様々な内外の要因の中で悩みながらも、進路を選択することが可能であるが、未定の男子のうち、特に進学したいが学力や経済的に困難であると思っている場合、それでは就職をという選択肢をとらずにフリーターに移行してしまう例が少なくないことが、生徒に対する進路指導部の聞き取りからわかっている。

進路選択支援の活動のなかでもその傾向が見られる。酒井他(2004)で指摘したように女子は、就職か進学かと大きくゆらぎながら進路を決めているのに対して、男子は進学という希望をいだきながらも、その実現に向けてのプロセスをなかなか歩めないといえる。そのことについて、男子をおもに支援したある大学生は、「男子は女子のように揺らいだり悩んだりしないけど、自分から積極的に取り組んだりする向上心はあまりない」と語っている。

すなわち、A商のような進路多様校の男子においてはユウスケのように親から大学に行けと言われ、本人もなんとなくそうだと思いつつも、そのための大学選びからして何をどうしてよいかわからないというような事例や、マコトのように大学進学を決意しながらも、そのためにやらなければならないことができないという事例がしばしば見られるが、それでも保護者は大学進学を容認している。もし、女子がそのような状態なら保護者のまなざしは厳しく進学など許さないものと考えられるし、また、女子自身がこんないい加減な気持ちでは大学には行けないと自己規制してしまうことも多い。

端的に言えば、男子は保護者に経済力があればなんとなくといった気持ちでも進学できる。だが、女子は明確な目的がなければ自他ともに進学が許されないということになる。A商は普段の学校生活場面でのジェンダー文化は男子の在籍数が女子の約2割に過ぎないことから、木村(敬)(2000)が指摘する「女らしさ」が相対的には強調されない脱伝統的文化的傾向が強い公立女子高に近いものと考えられる。また、いわゆる入試レベルでは、A商は最下位レベルであり、成績などの業績的価値よりも友人や彼氏彼女といった人間関係などを重視する傾向が顕著であり、「脱近代主義的価値観」(神田・清原(2000))をもつ傾向が強いと考えられる。

しかし、このような文化や価値観の状況にもかかわらず

らず、大学進学という進路選択においては、女子には説明責任が求められている。中西（1998）が指摘するジェンダートラックとは異なった枠組みでの進路選択過程が進路多様校には存在することが考えられる。

一方、男子においては、1998年3月卒の時点で、大卒就職者数（348,000人）が高卒就職者数（328,000人）を上回るといった高学歴化を背景として、男子は進学がふつうという価値観が、就職を重要な進路目標とするA商のような職業高校でも形成されていることが考えられる。このことは男子の在籍数が2割であるにもかかわらず、大学進学者数は女子と同数であるというA商の2003年卒業生の進路実績にも示されている。

佐藤（1984）は暴走族のエスノグラフィーのなかで、暴走族の「反抗モード」が多くの場合数年で落ち着いて、社会に取り込まれていくソフトな力を、「文化の呪縛」と指摘した。これと同様の呪縛が大学進学というかたちで本人・保護者のあいだで共有されたときには、たとえ生徒自身が脱学校文化的な「遊びモード」「お気楽モード」であっても、このソフトな力が作用する。従来はこのソフトな力は受験競争のなかに埋没し、大学進学のプロセスにおいて表出されることは稀であった。だが、近年の少子化による大学のユニバーサル化によって、外部からのある程度のサポートがあれば、勉強モードでない生徒にとっても大学進学が可能となっている。こうした中で、このソフトな力の存在が顕在化してきたのだと言える。また、さらに言えば、このような男子にとっては呪縛が解ける大学入学以後をどう過ごすかという課題が生ずるとも考えられる。

8 女子生徒の「アイデンティティ問題」と進路選択

A商の生徒の進路選択を見ていく中で浮かび上がるのは、進路多様校でも性による周囲の期待度が明確に異なっているという事実である。

「ジェンダーと進路」に関する先行研究でも、この点は学校文化のジェンダー・メッセージや子どもに対する親の期待度の性差として問題にされてきた。ただし、そこで問題にされてきたのはそうした期待に沿って社会化されていく過程であり、それを通じていかにジェンダーにより異なった進路へと水路づけられているのかが問題にされてきた。

だが、本プロジェクトが明らかにしたのは、そうしたメッセージを受け続ける中でも、あえて進学を目指そうとする女子の存在である。予定されたトラックから逸脱した者だと言える。本プロジェクトが見いだし

たのは冒頭でも述べたように、この逸脱の過程においてもまた女子生徒に特徴的な行動、すなわち進路意識上の転機が見られることである。何人かの女子生徒はある時点を境に、しばしば「野望」とも言えるような進路に挑戦すべく強く動機づけられていった。反対に少なくともこれまで本プロジェクトに参加した男子生徒には、こうした転機が明確に見られた事例はない。

なぜ、女子生徒には、鮮明に転機が存在するのだろうか？

我々はその答えの手がかりは、「ジェンダーと進路」問題を差別問題として理解するところにあると捉えた。女子生徒が男子生徒と大きく異なるのは、被差別者が担わされる「存在証明課題」を有するかどうかという点にあると考えたのである。

石川（1992）が指摘するように、人は人生の節目において、自分は誰であるのかというアイデンティティを証明しなければならないが、とりわけ自分の価値を剝奪される傾向の強い人々＝差別される人々は、自分の価値を守ろうとして存在証明に躍起になる。石川はこうして存在証明に人をくくりつける構造的な問題を「アイデンティティ問題」と名付けた。

もともと進路選択とは人生の大きな節目となりうる問題である。進路多様校に通う女子生徒が進路選択上に抱えている課題とは、まさに石川の言うアイデンティティ問題の1つであろう。彼女たちは、進路多様校に通う女子であるが故に、二重の意味で「大学に行っても仕方がない存在」として価値剝奪を被っている。男子の場合は、男子であるが故に進路多様校においても進学が期待されるため、進学希望を表明してもその理由を説明する必要性は低い。しかし、進路多様校の女子生徒にとっては、大学進学を目的を他者及び自己に対して提示し、納得させ／納得しなければならず、まさに「アイデンティティ問題」の1つとなっているのである。

最初に紹介したカズミにとっては、社会教育が自分が今までやってきたこととリンクしていることが分かり、社会教育主事に憧れていると周囲にも自分に対しても言えるようになったことで、志望大学への動機付けがいきなり高まった。リエにとっては、中学で勉強してこなかったと卑下する自分の自負を回復させるための大学進学であった。「大学を卒業した時に後悔しないように、勉強しとけばよかったと思わないように勉強したい」という言い方には、まさに自分に自分の価値を再確認させるための手だてとして進学が意味づけられていることが分かる。

一方、レイコはジェンダーの問題よりも、民族上のアイデンティティ問題が色濃く表れている。彼女にとっては、様々な価値剝奪がなされる中で、中国語を話せるという自負がアイデンティティの基盤であった。だが、一回目の試験で中国語が話せることをプラスに評価してもらえないわけではないと知ったことで、そのアイデンティティが大きく揺らいだのだと言えよう。二度目の受験は、彼女が唯一頼みとしてきた中国語の語学力をつける上で、進学できるか否かが彼女にとっての重大事となったことが大きい。このようにレイコにとってもまた、アイデンティティ問題を痛感させられた場面が転機となったのである。

9 終わりに

本報告が提示したのは、男子生徒は大学進学はふつうのこととするソフトな力に呪縛され、なんとなくといった気持ちで進学してしまうのに対して、女子生徒は被差別者としてのアイデンティティ問題が、彼女たちの進路選択を大きく規定していることである。「ジェンダーと進路」の領域においては、こうした要素はこれまでそれほど明確には対象化されてこなかった。

中西(1998)が整理しているように、高校生の進路選択においてジェンダーと進路の関係が論じられる場合には、学校内部効果やチャーターによる社会化作用が議論のテーマとされてきた。しかし、本報告で見えてきたのは、女子生徒へのメッセージは、単なる役割期待というよりは、アイデンティティ問題を生じさせるような価値剝奪のメッセージとして機能していることである。彼女たちに与えられるメッセージにそうした特性があるゆえに、それに対する女子生徒側の主体的な対応の結果として、大学進学に明確な目的が付与され、しばしば高望みともとれるような進路が選択されるケースがあるという事実である。

また、進路選択支援という実践的課題に照らした場合、本プロジェクトが示しているのは、進路選択を支援する際には、支援対象者の社会的立場とそこでの「アイデンティティ問題」の切実さの程度を前もって考慮する必要があるということである。女子においては、進学の意味が自分なりに納得でき、確固とした進学理由を持てることにより、そこへと大きく動機づけられていく傾向が強い。これに対して、男子生徒の進路選択への支援は、支援が彼らの切実な課題に関連づけにくいために、困難さを伴うことが多いと思われる。その意味で、男子生徒への進路選択支援にどのような手だてが効果的かを検討する必要がある。

ただし、アイデンティティ問題の切実さは、ジェンダーでのみ構造化されている訳ではない。時代を遡り、社会階層により親や周囲の進学期待が大きく異なっていた状況下では、男子生徒にも、ここで取りあげた女子生徒が経験したような「アイデンティティ課題」が、より鮮明に存在したであろう。そのような点から見れば、今のA商業高校において、もっぱら女子に対して「存在証明課題」が課せられるのは、その層に限定的にこうした問題が色濃く残っているということだと言える。その意味では今後、進学がますますユニバーサル化し、高校のように大学進学が当たり前となっていく場合には、A商の女子に特徴的に見られた現象すらも希薄になってくることも予想される。

なお、ここでの知見をより理論的に位置づける作業は今後の課題としたい。ここで見られた生徒の進路選択過程には、外部からの期待に対する生徒の主体的な契機が社会的に備わっており、ウィリスらの指摘に通じる部分もある。ただ、ウィリス(1985)が、アイロニカルにその主体性の限界を見いだし、再生産過程の説明を展開したのに対して、本稿での関心はむしろそこから解放であり、そのための支援である。この点に関して理論的な考察が待たれるが、それについては他日を期したい。

(文責：1、2、4、8、9 酒井、3、6、7 千葉、5 (ケース1、3、4 広崎)、(ケース2 齋藤・広崎))

参考文献

- 石川 准, 1992『アイデンティティゲーム—存在証明の社会学』新評論
- ウィリス, P., 1985『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房
- 神田道子・清原みさ子, 2000「キャリアパターン意識の構造」, 神田道子『女子学生の職業意識』勁草書房
- 木村敬子, 2000「学校のジェンダー文化と職業意識」, 神田道子『女子学生の職業意識』勁草書房
- 木村涼子, 1992「女性の性役割受容をめぐる」『大阪大学人間科学部紀要』第18巻 101-115頁。
- 酒井 朗・千葉勝吾・濱野玲奈・広崎純子, 2004「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究—A商業高校での支援活動の取り組みを通じて—」『お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター紀要』第2号 85-100頁。
- 佐藤郁哉, 1984『暴走族の研究—モードの叛乱と文化

の呪縛』新曜社

デンジン, N.K., 1992『エピファニーの社会学：解釈
的相互作用論の核心』マグローヒル出版

中西祐子, 1998『ジェンダー・トラック：青年期女性
の進路形成と教育組織の社会学』東洋館出版社